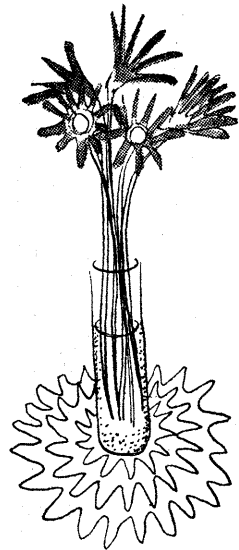


雛祭への提言

今年も雛祭の季節がやってきた。私は日頃から現代の雛祭に対し、少々不満を持っている。それをひとことと表せば、「現代の雛祭は様式化されすぎて、雛祭のころを忘れてしまっている」ということになるだろうか。なぜこんなことになってしまったのか、理由はいくつか考えられる。それらのひとつひとつをとりあげて、雛祭への提言としてみたい。

雛祭は四月三日に



石沢 誠司

まず雛祭の日取りの問題がある。現在ほとんどの家庭は、三月三日に雛祭りをおこなう。しかしこの時期は早春とはいえず、まだ冬の気候の揺り戻しがあって非常に寒い時期である。京都でも時々雪がふることがあるほどだ。おまけにちょうど受験期と重なる。新聞に「受験ビナ」などと雛段の人形よろしく受験生の姿が写真で報道されるのがこの季節である。受験生を持つ家庭では、本人のみならずその家族のための雛祭もできかねるのが実情ではなからうか。

ではどう改めたらよいだろうか。答えは簡単である。

日取りを一カ月ずらし、四月三日にすればよいのである。現在でも田舎のほうではこの方式をとっているところが結構ある。いわゆる月遅れの雛祭である。

雛祭を一カ月遅らすことにより、いろんな利点が出てくる。まず気候が暖くなるから、人形を飾るのに条件が良くなる。寒い時期はどうしても暖房をするので、部屋の湿度がきわめて低くなる。異常乾燥の状態である。こんなところに人形を飾ると、ヒビわれなどの事故が起きやすいのである。

そして文字通り「桃の節句」という言葉にふさわしくなるのだ。ちょうどその頃から桃の花が咲きはじめるからである。もともと雛祭が旧暦でおこなわれていた頃、三月三日は現在の四月三日前後になっていたのであるから、桃の花も咲く頃だったのである。

そして現在、四月三日は受験結果も明らかにになり、自分の進路も決って、若者が未来へ歩み出すときである。

学校も休みであるし、家族で雛人形をとりだして並べる

のに最適の時期ではないだろうか。

内裏雛だけを買おう

二番目の問題は、雛飾りの定型化である。現在の雛飾りは、誰でも知っているように、上段から内裏雛・三人官女・五人囃子・隨身・仕丁とならび、さらに雛道具が置かれる。全国どこへ行っても同じで、きわめて定型化されてしまっている。百貨店や人形店へ行き、この雛セツトを注文しさえすれば、もう道具立ては完了である。

あとは並べさえすればよい。この方式は簡単ではあるが、味気ないではないか。

いったいいつから日本人はこんな雛飾りをするようになってしまったのか。私は数年前から、日本の各地に今も残っている伝承的な雛祭を調べているが、日本人はつい最近まで、つまり昭和初期の頃までは、実にさまざまに雛飾りをしていたことがわかった。

たとえば、写真1は岐阜県明方村^{みょうかた}で現在も行なわれている雛飾りであるが、ここには三人官女もいなければ五



▲写真1 岐阜県明方村の土雛飾り

人雛もない。しかも並んでいる人形は、みな土人形なのである。また長野県松本市周辺では、現在はしていないが昭和初期までは、押絵雛といって厚紙に布を貼った雛人形を飾っていた。素朴ではあるが自由に個性的なこうした雛飾りは、現在の私たちに雛祭の心を教えてくれるような気がするのである。

では具体的に現在の雛飾りをどうすればいいのか。私は二、三の提案をしてみたい。まず百貨店や人形店で雛人形を買う場合、内裏雛だけにすることである。これは「親王飾り」などと名付けて売っている。そしてこの年は親王飾りだけを並べてじっくりと楽しもう。翌年は三人官女などを揃えるのはやめて、市松人形でもいい、風俗人形でもいい、博多人形でもよろしい、気に入った人形を買って親王飾りの下段に並べるのである。こうして毎年ひとつふたつ人形を増やしてゆくようにすると、日本にはいろんな人形があることがわかってくるだろう。

土人形あり、張子人形あり、木彫の人形がある。旅に出たとき記念に買ったものでもよい。毎年最低一体ずつ

増やしてゆくのである。子どもが大きくなってきたら、いっしょに相談して買ってよい。こうしてひとつずつ増やしていった雛飾りは、その家だけしかない個性的なものになる。

また友人や親せきに子供の誕生祝や初節句の祝いをするときは、現金や商品券をやめて人形を贈ったらどうか。何も私は人形業界の宣伝をしているわけではない。

調べてみると明治大正期の頃は、初節句に人形を贈ることが非常に多かったのである。

たとえば、宮崎県佐土原町で聞いた話であるが、この地方では女の子の初節句の祝い物として、親せきや知人が反物といっしょに土人形を贈ったものだという。身近な家だと高価で大きな土人形、つきあいの少ない家だと小さな土人形を贈った。もらった家は雛段にそれらの人形をずらりと並べて、近所の人に見てもらったものだという。このとき人形がたくさんあるほど、あの家はつきあいが広い、信用がある、といわれたという。

なかなかおおくゆかしい習慣ではなからうか。こういう

た習慣は全国にみられ、現在も多少残っている。しかしなんととっても段飾りセットの普及で、贈られた人形を並べる場所がなくなってしまったのが、この習慣の衰えた原因なのである。内裏雛の下段を自由に人形を飾る空間として確保すること、これが個性的な雛飾りへの出発点である。

雛祭は男女いっしょに

最後に、私は雛祭を男女両性を祝う行事として発展させたらと思う。雛祭は女の子、端午の節句は男の子、という考え方が現在は一般的である。そして雛祭には雛人形、端午の節句には鎧よろい兜かぶとや大将人形を飾る。私の提案は、この人形飾りを雛祭にいっしょにしてはどうかということである。

こうすると、雛人形といっしょに武者人形が並ぶことになる。都会のかたは何かとまどいを覚えるかもしれないが、田舎のほうへいくと実はこうした飾り方が、昔からかなりおこなわれていたのである。



▲写真2 京都府園部町の雛飾り

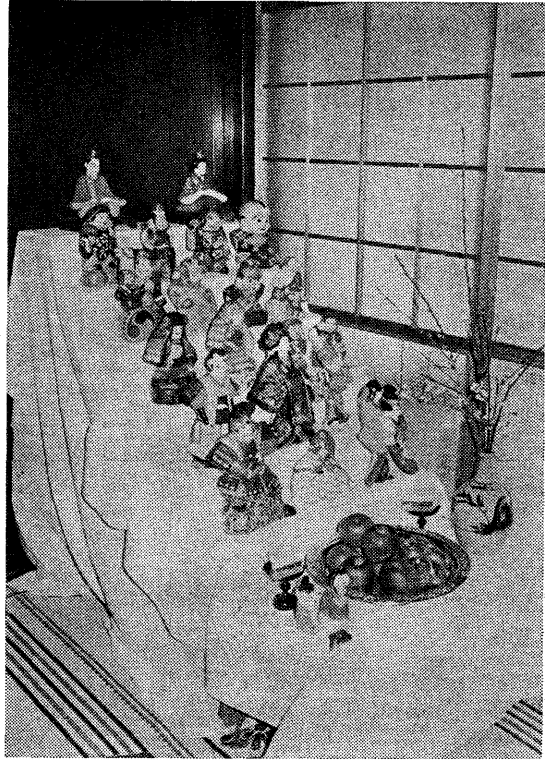
そのいくつかをお目にかけて、まず写真2をごらん
いただきたい。これは京都府園部町のある民家の雛祭で
ある。上段に内裏雛、二段目に武者人形が並んでいる。

この家では女の子の人形と男の子の人形を同時に飾って
いるのである。そして三段目右半分には並ぶのが土人形
で、これは京都の伏見人形である。金太郎や天神は男の
子の人形、おぼこ（立娘）は女の子の人形である。いず
れも親せきや知人から初節句の祝いにもらったり、親が
買ってあげたものである。私がめざすのは、いわばこん
な感じの雛祭なのである。

また写真3は、1と同じ岐阜県明方村の土雛飾りであ
るが、よく見ると雛段には福助やえびす大黒にまじって
大将人形も何点がある。この村もまた雛祭は男の子と女
の子の祭なのである。

よく考えると、内裏雛自体が、男雛と女雛からなっ
て
いるのではないか。そもそもお雛さん自体が男と女を切り
離しては成立しない存在なのである。私は雛飾りは、男
と女が仲良く睦まじく暮らす、ということの象徴だと思

う。初節句を迎えたわが子に内裏雛が贈られるのは、この子がすくすくと大きくなって、ゆくゆくはこのお雛さまのように良い伴侶を見つけて仲良く暮らして欲しい、という親の願いが込められていると思う。これは女の子にも男の子にも言えることで、私は男女がいっしょに雛祭をするのはちっともおかしなことではないと思うの



▲写真3 岐阜県明方村の土雛飾り

である。

ひとつひとつの人形が、家族のみんなとつながりを持ち、人形をなかたちとして親と子の心がかよう雛祭をつくりあげていけたら素晴らしいと思う。

(京都府立総合資料館)